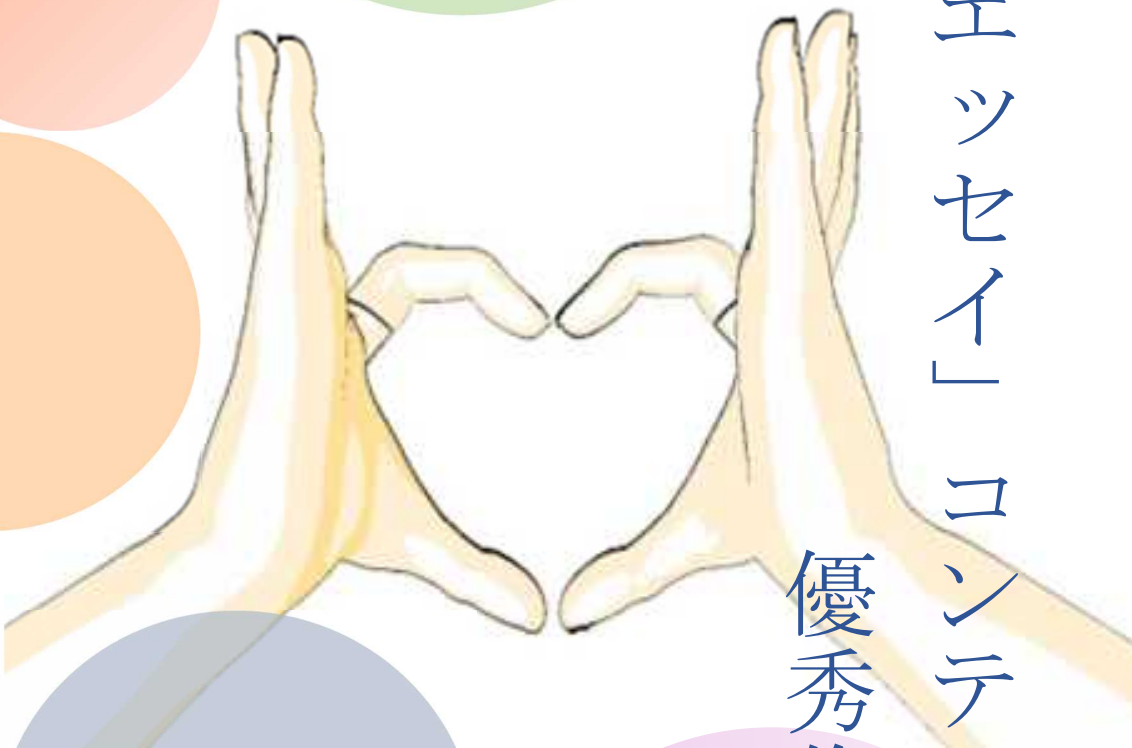


令和四年度

「モラル・エッセイ」コンテスト

優秀作品集

福島県教育委員会



令和四年度 道德教育総合支援事業

「モラル・エッセイ」コンテスト優秀作品

【中学生の部】

最優秀賞

「揺れるポップと私の気持ち」

いわき市立小名浜第二中学校

二年 滝澤 飛雅

さん

優秀賞

「やさしさと母の愛情」

大玉村立大玉中学校

一年 佐原 凜

さん

優秀賞

「花火大会」

いわき市立中央台北中学校

二年 山内 莊大

さん

優秀賞

「十三歳、兄になる」

伊達市立桃陵中学校

二年 菅野 洵冴

さん

【高校生の部】

最優秀賞

「母の言葉」

好間高等学校

三年 石井 凜

さん

優秀賞

「言えない『ごめんね』」

好間高等学校

三年 岡 玲奈

さん

優秀賞

「枯れない花」

橘高等学校

一年 村松 花菜

さん

【一般の部】

最優秀賞

「休日の遊園地」

福島市在住

渡邊 定行

さん

優秀賞

「鈴の音」

いわき市在住

鵜沼 智子

さん

## 揺れるポップと私の気持ち

いわき市立小名浜第二中学校

二年 滝澤 飛雅

「てまえどりにご協力ください。」

目の前に突如として現れた葉っぱのようなお知らせがゆらゆら揺れて、私にアピールしてくる。先日、弟と買い物に行った際、このポップを読み、二人で相談して、一番手前に陳列されていた商品を買った。帰宅すると、母に、

「賞味期限すぐ切れるじゃない。もっと新しい物はなかったの。」と言われた。弟と何が正解だったのかを話し合ったが、答えはすぐに出なかった。

日本でまだ食べられるのに廃棄される食品、いわゆる「食品ロス」は、年間五七〇万トン。毎日、大型トラック（二〇トン車）約一五六〇台分の食品を廃棄しているというから（「政府広報」参照）驚きだ。

こんなに大量の食品が捨てられると知ったら「てまえどり」に協

力したいところだが、五人家族の我が家では、日付の新しい物を買うことが多い。食パン・牛乳・納豆・玉子・・・、予定が変わって捨ててしまったらそれこそもったいない。もちろん、すぐに食べる時には「てまえどり」をするようにしている。

私の祖母は二人暮らしだ。食材を小分けにし、工夫して料理しても食べる量は少ない。そうになると、祖母には日付の新しい物の方が長持ちするので有り難いそうだ。

ある日、一緒に買い物に行くと、祖母は予定を考えながら棚の後方から商品を選んだ。その時に陳列を崩し、居合わせた店員に聞こえるように文句を言われた。私と祖母は悲しくなった。そんなに悪いことだろうか。どちらが善で、どちらが悪か。今のモラルはそれを瞬時に判断できないこともある。個々人に「食品ロス」を防ぐ気持ちがあるなら、商品を後ろから取っても良い場合もあるのではないだろうか。何かを考える時に、一つの価値観だけで善悪を決めつけず、みんなで最善策を考え、見守り合える優しい社会になったら、揺れるポップに私の心も揺れた。

## やさしさと母の愛情

大玉村立大玉中学校

一年 佐原 凜

今年の連休明けの頃でした。私と両親との約束で、私がゲームをするのは一日一時間です。しかも、必ず宿題を終えてから、です。その日は、確か金曜日だったと思います。帰宅したら誰もいませんでした。机の上に、「仕事で少し遅くなる。ゲームはちゃんと宿題を終わらせてからね。」というメモがありました。私はすぐに机につき、学校のカバンを開けました。しかし、金曜日で明日は休みだ、という気のゆるみからか、カバンのふたを戻してゲームを始めました。時計を見ると、五時半でした。あと一時間ゲームを楽しんでから、宿題をやるうと、悪い心が決めました。その時です。予想外に早く母が帰ってきました。ゲームの画面が映っているテレビの前に母は立ちました。宿題はやったのか、との問いに私は理由も分からず、母に向かって、子供が言っていない、とても悪いことばを連発してしまいました。生まれて初

めて口にするセリフも含まれていました。それを聞いた母は、顔を真っ赤にして、私を怒りました。私は、さらに最悪の捨てゼリフを放って、自分の部屋にとじこもりました。

どのくらいの時間がたったのかは覚えていませんが、泣きながら布団にくるまっていた私の耳に、ドアをノックする音がしました。すぐにはドアを開けずにいました。二十分ほどすぎたあたりで、そつとドアを開けてみると、ろう下におにぎりと手紙が置いてありました。その手紙を読みました。まず一行目に、大声で怒鳴ってしまったことへの謝罪の言葉がありました。私はとてもおどろきました。その後には、約束を守ることの大切さ、家のルールはすべて家族一人一人のためにあること、いつでも、いつまでも私のことを信じているから、と書いてありました。食べたおにぎりは、母の愛情がたくさんつまっていました。

## 花火大会

いわき市立中央台北中学校

二年 山内 荘大

今年の夏、三年ぶりに小名浜の花火大会が開催された。夜空に開く花火はとてもきれいで感動的だった。

新型コロナウイルスの感染者が日に日に増加する中での実施ということもあって、開催して本当に大丈夫なのだろうか・・・、人出のあるところに行っても良いのだろうか・・・という不安や迷いが僕の中で渦巻いていた。

コロナ禍に巻き込まれて三年目になる。僕たちはことごとく我慢を強いられてきた。小学校で楽しみにしていた修学旅行も、中学校入学後に初めて経験する部活動の大会も、文化祭も、ありとあらゆるものが中止や規模縮小という形になった。家庭生活においても、家族旅行や外食は控えるようになったし、友達と家で遊ぶのでさえ躊躇しなければならなかった。今回の花火大会も、僕たちの一番の楽しみとも言える夜店の出店もなく、時間も短縮さ

れての開催であった。

いろんなことが頭の中をぐるぐると駆け回って、少し怖くなったしまったが、せつかくの機会なので花火を見に行くことにした。会場に着くと、たくさんの方が来ていて、今か今かと待ち構えている。僕も、少しどきどきしながら、始まるのを待った。

「あつー！」という歓声とともに、色とりどりの花が夜空に開く。そのあとに、「ドンッ」という地鳴りのような音が腹に響く。そして、漂う火薬のにおい。どれもが、懐かしいような、それでいて新鮮な感覚であった。

夜空を見上げる人達の顔を見ると、みんなが同じ方向を向き、そして笑顔があふれている。なんだか、こんな状況だけど、みんな希望を持って同じ方向を見て、頑張っていこうという姿のようにも思えてきた。僕は、こんなコロナ禍だからこそ、希望や明るさを持てる花火大会を実施することに意味があるように感じた。厳しい時期はまだ続くかもしれない。だけど、諦めずに前進したいと思った。

十三歳、兄になる

伊達市立桃陵中学校

二年 菅野 洵冴

「なんて小さいんだろう。でもずっしり重いな。」

十二月二十日、その日僕は兄になった。二五七八グラムの男子。十三年間ずっと一人っ子だった自分。僕は小学四年生の時から弟か妹が欲しかった。だから母が妊娠した時、嬉しかった。でも、十三歳の自分。友達が知ったら何て思うか不安だった。だからお腹が大きくなっていく母と一緒に歩くことが恥ずかしかった。僕と母の間にはいつも以上の距離を感じていた。

「ねえ見てみて。これが赤ちゃんだよ。」

母は健診の後、必ず僕に赤ちゃんの動画を見せてきた。最初は豆つぶだったのに、人間に見えてきて、とても不思議に思った。僕もこんなふうに育ったのかと思うと少しぞつとした。夏には男子だと分かり、弟だったら、話が合うし、一緒に遊べるなど、気がつくとも口元がゆるんでいた。お腹の中の弟に元気で手足を動か

し、僕はここにいるよといつも僕にアピールしていた。まだ、顔も泣き声も分からない弟。僕はその存在を、まだ受けとめきれずにいた。兄って何だろう。僕は少しだけ寂しさを感じていたのかもしれない。

母が弟をつれて退院してきた。初めて触れる弟。手は小さく細い足。抱っこしたら壊れてしまいそう。目を開けて僕をじつと見ると少しほほえんで見せた。可愛い、今までに感じたことのない“可愛い”だった。僕が生まれる前に感じた不安や寂しさは一瞬で消えた。

弟は今、生後七ヶ月。はいはいが上手になり、僕を見て笑いながら声を出す。弟の顔を見ると僕も家族も自然と笑顔になり、やわらかい雰囲気になる。僕にとって弟は小さく愛おしい守るべき存在。友達にも弟が生まれたことを自慢気に報告できた。大きくなったら一緒に公園へ遊びに行こう。キャンプしよう。勉強も教えるよ。だから元気に早く大きくなってね、世界にたった一人の大切な弟よ。

## 母の言葉

福島県立好間高等学校

三年 石井 凜

土曜日の部活の帰り、丁度いいバスの時間がなかったため、運動がてら歩いて帰ることにした。

私がいつもバスで通っている道を歩いていると、人がたくさん集まっているのが見えた。私は一瞬、近くにきれいな駄菓子屋さんができたから混んでいるのだろうと思った。しかし、車も混んでいて全然進まないの違和感を持ち、様子を見に行くことにした。様子を見に行くと女の人と車が接触事故を起こしてしまっていた。女の人は、倒れ込み腰をおさえていた。一人の女の人に「ご家族の方ですか」と声をかけられた。その女の人の手には接触してしまった女の人の免許証とメモ用紙を持っていた。私は、「家族じゃないです。通りがかりです。」と答えた。その女の人の他にも、日傘をさして気分が悪くならないようにしてくれている人や、救急車を呼んでくれている人、自転車を移動してくれている

人、散らかってしまった荷物をまとめてくれている人、家から氷を持ってきて腰のあたりを冷やしてくれている人などたくさんの方が協力していた。私も散らかってしまった荷物の片付けを手伝った。すると、一人の男の人から、「高校生なのに通り過ぎないで立ち止まってくれてありがとう、助かったよ。」と言われた。何も出来なくて焦っていたため私は、とても嬉しかった。

その後、帰り道で、小さい時から母に言われた言葉を思い出した。「困っている人を見つけたら、考える前に助けに行きなさい。」この日私は、母の言葉の通りに少し出来た気がした。

私は、通りがかりに助けていた方々を見て、私は常に親切な心を忘れない人、そして、すぐ行動に移すことができる人になりたいと思った。私はこれから先、困っている人をすぐに助けに行くような、看護師になりたいと思っている。

言えない『ごめんね』

福島県立好間高等学校

三年 岡 玲奈

小学校一年の時のことだ。いつもは友人とくだらない話で盛り上がりなかなか家に着かない私であったが、この日だけはそうではなかった。友人に手を振り一人走って家に帰った。

家に着くと、真っ先に宿題に取り組む。何でも後回しにする私だが、ここまで急いでいるのには理由がある。楽しみにしていたプリンを食べる為であった。やることを終え、やっと食べられるという思いで冷蔵庫を開けた。プリンは無かった。私は頭が真っ白になった。すると、それを見ていた妹が「私が食べた。」と言った。私は、怒りを感じ、しばらく口を利くことができなくなってしまった。正直に自分の間違いを認めた妹を許してあげることができなかった。

それからしばらく経ったある日のこと。家へ帰ると、テーブルの上にプリンが置いてあった。買ったプリンではなく一から手作

りしたものだだった。「これあげる。」と妹が恥ずかしそうに私に言った。食べてみると、とても美味しかった。妹に対して、あんなに怒っていた自分に笑ってしまう気持ちにもなった。

その日の夜、私は一人で考えた。私は昔から人に謝ることが苦手だった。しかし喜んでほしいという妹の純粋な気持ちが私を変えてくれたのだと思った。

すぐに「ごめんね。」と言えば、お互いその場では済むことであつたと思うけれど、人の為を思っただけが本当の仲直りに繋がったのだ。だから私は、悪いと思っただけで謝るようになっている。それが人と上手く付き合うきっかけになると思っっているからだ。



## 枯れない花

福島県立橘高等学校

一年 村松 花菜

私には大切な宝物がある。それは沢山の花だ。同じものも一つもなく、永遠に枯れることのない花。この花を咲かせるきっかけをつくってくれたのは私が中学生で三年間お世話になった担任の先生だ。先生はある時、クラスで「教室にお花を咲かせる活動」を始めた。お花の形の紙にクラスメイトの良いところや感謝のメッセージなどを書いて教室の掲示板に貼るという活動だ。クラスみんなが私に書いてくれたメッセージを読んでいる時間、逆に自分がクラスメイトへメッセージを書く時間が私は大好きだった。三年間でその花は数えきれないほど咲いた。そしてその花の数が増えると共に私たちは互いに認め合い、感謝し、それを言葉にして伝えることができるクラスになった。こんな素敵な活動を始めてくれて、私たちをここまで成長させてくれた担任の先生には感謝してもしきれない。

中学校を卒業して、高校生活が始まった。新しいことばかりで期待もある反面、不安もあった。クラスに知っている人は誰もおらず、今は教室に沢山の花が咲くこともない。私は中学校との違いになかなか慣れることができなかった。そして私たちが当たり前前に行っていたことが周りからしたら当たり前ではないということが少し悲しかった。そんなある日、ふとあの花のことを思い出し、読み返してみた。そこにはみんなが見つけてくれた私の良いところが沢山あった。全て読み終わった時には、気持ちが明るくなっていた。中学校で咲いた花が高校生の今の私を元気にしてくれた。この時、改めてこの花の力の凄さを感じた。一枚の紙がこんなにも人を元気にさせてくれるのだ。

高校生活は毎日大変で疲れてしまうことも多い。でも私には元気をくれる大切な花がある。きっとこれからもこの宝物は私を元気にさせ続けてくれるだろう。

そして次は私が高校にこの花を沢山咲かせたい。先生のように。

## 休日の遊園地

福島市在住

渡邊 定行

三年生の修学旅行に引率した時のことです。USJの人気アトラクションは、長い列ができていました。そんな光景を見て、あることを思い出しました。

福島市に児童公園があります。乗り物もいくつかあり、休日は家族連れで賑わいます。一番人気は“わくわくトレイン”です。私も子どもと列に並びました。五両編成の電車は定員一回二十名。なかなか順番が回ってきません。待っている親子もイライラしてきます。

「まだなの？早くしてよ！」と、不満を口にする親もいます。

「次は乗れるかなあ？」

と、私の前にいた小さな女の子がお母さんに言いました。お母さんは、にっこり頷きます。

「ご乗車ありがとうございます。足元に気を付けてお降りくだ

さい。」

係員の誘導で、観覧車から人々が降りてきて出口に向かいます。それと同時に、前にいる母娘も、そして私たちも入場口に足を進めます。係員が、入場する人を数えています。

「十七、十八、十九、はい、ここまでです。」

係員が入場を止めたのは、無情にも小さな女の子と母親の前でした。女の子は泣き出しそうです。

残念がっている娘に、お母さんは何と声をかけるのだろう。「残念ね。」ならまだしも、「何分待っていると思っているの？」と不満を口にしないだろうか。私はドキドキして様子を見ていました。でも、お母さんの言葉は私の悪い予感を見事に裏切ってくれました。

「〇〇ちゃん、良かったね！次、一番前に乗れるわよ！」

その言葉に女の子はすぐに、万歳しました。

ピンチをチャンスに、失望を希望に、悲しみを喜びに変えたお母さんの一言でした。今から二十年前の話ですが、私の心はずっと温かく残っています。

## 鈴の音

いわき市在住

鵜沼 智子

娘を送り出す朝、背負った通園カバンから必ず聞こえてくる音がある。カバンについているのは、猫の顔が描かれた白い鈴。山形に住む曾祖母が、ひ孫達にと贈ってくれたものだ。末娘は姉たちとおそろいの鈴に大喜びで、早速通園カバンに取り付けた。歩くたびに、

「チリリン、チリリン。」と鳴る。なんだかお守りみたいだな、と私は思った。

私の娘達からすると曾祖母、つまり私の母方の祖母は、私が子供の頃、夏休みにだけ会いに行く存在だった。毎年遊びに行くこと歓迎してくれたが、現代の祖母と孫のように、手放しで甘えられる関係ではなかった。遠方に住んでいて年に一度程度しか会わないからなのか、祖母の性格なのか、不思議な距離感があった。そんな祖母に、一度だけ厳しく怒られたことがあった。

私と二人の妹が、親戚からもらった色ペンを取り合ってケンカをしていた時だ。

「今の子どもは、わがままだにやあ。」

山形弁で、そう言われたと思う。大きな声だったような気もするが、ぼそつとつぶやいただけだったのかもしれない。ただ、その祖母の一言を聞いて、私達姉妹のけんかはぴたつと止んでしまった。小学校高学年だった私は、「今の子ども」という言い方に、色々な意味が含まれている気がして、この言葉がずっと忘れられなかった。大正生まれで、戦争を経験している祖母にとって、「今の子ども」であった私達孫は、どんなにわがまま放題に見えていただろう。先日、その祖母が一〇一歳でこの世を去った。病氣一つしていなかったが、急に体調を崩して眠るように亡くなったという。葬儀の日、美しい新雪に囲まれた山形の景色の中で娘達は無邪気にはしゃいでいた。その姿を見ながら私は思った。目の前のこの子達は、祖母が生きた人生があったから、今ここに存在しているのだなと。今日も鈴の音は聞こえている。

